報告

デジタルハリウッド大学総合日本語クラスでのアニメとマンガの活用

The Use of Anime and Manga in “Contents Japanese Class” at DHU

臼井 直也　USUI Naoya

デジタルハリウッド大学 准教授
Digital Hollywood University, Associate Professor

本報告は、2024年度1Q、2Qに実施した選択科目「総合日本語」クラスの授業報告である。2024年度に始まったこの日本語クラスは、従来の日本語クラスとは異なる教員の専門性を活かした授業である。1Qではアニメを用いた日本事情クラス、2Qではマンガを用いたマンガ読解クラスを行った。1Q、2Qを通して学生のモチベーションを高く維持することができ、授業への積極的な参加を促して、授業目標が達成できた一方、課題の設定や予習内容の調整など授業運営上の課題が多く残った。

1. はじめに

デジタルハリウッド大学における留学生に対する日本語クラスは2023年度まで「日本語基礎Ⅰ～Ⅳ」「日本語Ⅰ～Ⅳ」が言語およびアカデミックスキル中心、「日本語Ⅴ・Ⅵ」がそれぞれ日本の地理、歴史を学ぶクラスであった。学生は日本語レベルによってクラス分けがされていたものの、授業内容は各クラスで共通の枠組みが用いられた。2024年度から始まった「総合日本語」クラスは、教員の専門性を活かした授業であり、コンテンツと言語を合わせたCLIL（Content and Language Integrated Learning）型の選択科目である。筆者は2024年度1Qにアニメを用いた日本事情クラスを、2Qにマンガを用いたマンガ読解クラスをそれぞれ担当した。本稿はこれらの授業報告である。

2. 先行実践報告

アニメの活用については、これまで言語形式の習得や口頭表現の習得に焦点を当てた実践が中心であった。本稿で扱う日本事情や日本文化とアニメを組み合わせた実践には、初級レベルの日本語学習者に対してアニメの歴史と日本社会の変遷を関連付けた授業[1]、実写映画やTVドラマ、アニメを統合的に活用し家族、ジェンダー、教育など自・多文化を映像を通して読み解く実践が行われている[2]。これらの実践と比較し、本実践では単一監督のアニメ作品だけを活用している点、授業内の使用言語が日本語である点、そして2000年代から2020年代の新しい作品を活用している点に特徴がある。

マンガ読解に関してはこれまで国語教育での実践が中心であった[3]。日本語学習者を対象とした研究としてはマンガ読解過程を明らかにしようとした研究がある[4]が、コースを通してマンガ読解を行い、マンガリテラシーの涵養を目標とする先行実践は管見の限り見当たらない。

3. 授業概要

3.1 1Qのアニメを用いた日本事情クラス

このクラスは、新海誠作品を使い、日本事情を学ぶクラスである。新海作品を活用した理由は、災害、民話や神道、学校や家族などの多様な日本事情が複数作品で描かれており、例示や比較が容易だからである。

授業目標は以下の３点である。

・アニメ作品の中にある「日本」を深く理解できるようになる
・クラスメートとのディスカッションを通して自分の理解を深めることができるようになる
・多くのアニメ作品の中にある「日本」を比べることができるようになる

ここで、「日本」という言葉の扱いについて補足する。一般的な日本事情クラスでは写真などが掲載された教科書や映像教材を使うことが多いが、本授業では新海アニメを用いた。この点において、本授業で扱う日本とは「新海アニメに描かれた日本」という限定的な意味である。1Q全８回の授業であるが、最終週以外で７つのテーマ「災害、異常気象」「都市」「地方」「民話」「神道」「学校」「家族」をそれぞれ扱った。授業で活用した作品は、『秒速５センチメートル』（2007）、『言の葉の庭』（2013）、『君の名は。』（2016）、『天気の子』（2019）、『すずめの戸締まり』（2022）に加え、CM用に制作された『クロスロード』（2014）である。

授業活動についてだが、まずはテーマについての簡単なディスカッションを前活動として行い、その後、短い文章の読解を行う。この文章は筆者が作成したもので、各テーマの概説に加え新海作品での描かれ方を説明したものである。その後、新海作品の映像や画像を見て読解の内容を確認する。最後にその週のテーマが描かれている他の作品（アニメや実写映画）を挙げ、新海作品との比較を課題とした。翌週は新しいテーマに入る前に課題のフィードバックを行った。

評価は期末レポート（50%）、課題提出（40%）、授業参加度（10%）であり、期末レポートのテーマは「授業で扱ったテーマから１つ選び、新海作品以外の２作品を視聴し、３作品間で比較する」「授業で扱わなかったテーマを設定し、新海作品と他の１作品を比較する」の２点である。後者の新たなテーマには、食べ物、交通、恋愛、進路、性風俗などが選択された。

3.2 マンガを用いた2Qのマンガ読解クラス

このクラスは、マンガ『魔法使いの嫁』を使い、マンガ読解を学ぶクラスである。教科書は筆者が作成に携わった『マッグガーデン公認日本語学習者のための“魔法使いの嫁”で学ぶマンガの読み解き』を使用した。

授業目標は以下の３点である。

・母語に頼らずマンガを日本語で読むことができるようになる
・マンガの内容を読み解き自分の解釈を説明できるようになる
・マンガとアニメの演出の違いを理解することができるようになる

本教材はこれまでも複数の大学で活用しているが、本学での活用の特徴として授業目標の３点目である「マンガとアニメの演出の違い

を理解できるようになる」が挙げられる。これは本学ではマンガを専門とする学生よりアニメ等の映像を専門とする学生の方が多いためである。

授業活動についてだが、教科書のマンガパートを読んだ後、内容確認問題、ディスカッション活動を行い、同じシーンのアニメを視聴しマンガとの演出の違いについて確認を行った。課題はディスカッションテーマに対する自分の考えをまとめて提出するものである。翌週に課題提出者の意見をまとめてフィードバックした。また、成績と関わる課題ではないが翌週の授業で扱う場面までのストーリーをコミックスかアニメで確認してくることも宿題として課した。

評価は期末レポート（50%）、課題提出（40%）、授業参加度（10%）であり、期末レポートのテーマは「ストーリーで印象に残ったこと（3つのテーマから1つ選択）」「授業を受ける前と受けた後で、マンガの読み方にどんな変化があったか」「マンガ版とアニメ版の演出の違いについての分析」の3点である。

4. 学生の授業評価

本学では各授業実施後にLMS上で学生が授業のフィードバックシート（FS）を提出することになっている。FSにはいくつかの項目があるが、その中の一つに「今回の授業にどのような感想をもちましたか？」という質問があり、学生は「将来役立つ内容だった」「興味が持てない内容だった」「興味がある内容だった」「すでに知っている内容だった」「新しい発見があった」から回答を選択する。

1Qの「アニメを用いた日本事情クラス」では、全回答のうち64%が「興味がある内容だった」、36%が「新しい発見があった」であり、否定的な評価は見られなかった。

2Qのマンガを用いたマンガ読解クラスでも同様に、全回答のうち56%が「興味がある内容だった」、44%が「新しい発見があった」であり、否定的な評価は見られなかった。また、期末レポートのうち「授業を受ける前と受けた後で、マンガの読み方にどんな変化があったか」というテーマへの記述には、「マンガの縦書き表記に少しずつ慣れていった」「これまでは感覚で読んでいたが、キャラクターの台詞から感情を読み取れるようになった」「フォントの変化による演出やコマの配置、コマ間の空白などが理解できるようになった」「単なる娯楽としての読み方から、作品全体をより批判的かつ多角的に解釈する読み方へと変化した」などマンガリテラシーを学びマンガをより深く読めるようになったと感じた学生の記述が複数見られた。

5. 今後の課題

授業実践研究は、本来PDCAサイクル（計画、実施、評価、改善のサイクル）で行うことが望ましく、1回の授業実践だけでは改善から再計画、再実施まで行うことができない。そこで本稿では、来年度の授業に向けた課題を提示するに留めたい。

5.1 アニメを用いた日本事情クラスの課題

日本事情クラスの課題は読解文の作成および比較作品の選定である。本授業では各テーマに関する1200字程度の読解文を筆者が作成したが、学生にとっての難易度が適切であったかは検証が必要である。また、今年度は読解文への内容理解問題をつけることができなかったため、来年度以降の課題としたい。

比較作品の選定であるが、本来は比較作品は視聴が比較的容易な映画作品に限定し、視聴してきた作品について翌週の授業でディスカッションをする予定であった。しかしながら新海作品との比較に適した作品の選定を十分に行うことができず、教室内で学生を交え比較作品のアイディア出しを行う時間を設けなければならなかった。結果的に比較作品が複数になってしまい、予定していた形式でのディスカッションを行うことができなかった。

5.2 マンガ読解クラスの課題

マンガ読解クラスの課題は学生の予習の多さ、およびそのバランスである。本授業で使用した教科書は16回分の授業を想定して作成された全16課の教科書であり、コミックスの1巻から9巻を抜粋したものである。各課の間でストーリーが省略されるため、省略された部分の内容をコミックスやアニメで確認することが必要となるが、これが全8回の授業では省略されるストーリーがさらに増えることになってしまった。また、各課で省略されているストーリーの長さが異なるため、予習がほとんど必要ない週もあれば、多くの予習が必要な週もあり、バランスが悪かった。授業で扱う課の選定や予習時間の調整については今後の課題である。

6. おわりに

本稿では2024年度に新たに始まった選択科目の総合日本語のうち、筆者が担当したアニメを用いた日本事情クラスおよびマンガを用いたマンガ読解クラスの報告を行った。先述のとおり授業実践研究はPDCAサイクルで行うことが望ましい。よって、来年度以降、課題を改善し授業の質を上げていきたい。また、本報告では授業評価は定量的なアンケートのみであったが、履修学生へのインタビュー等、定性的にも分析していきたい。

参考文献

[1] 小松満帆：『授業報告 初級日本語学習者への日本文化教育―アニメを題材として』立教大学ランゲージセンター紀要（2011），75-82頁.
[2] 中河和子，深澤のぞみ，濱田美和：『留学生の現代日本事情理解のツールとしての映像と「映像読解教育」の試み』富山大学留学生センター紀要（2003），33-44頁.
[3] 早野慎吾，宮田好恵，松井洋子：『マンガを活用した国語教育（2）―授業実践から―』都留文科大学研究紀要（2018），27-38頁.
[4] 正木みゆ：『文芸的ストーリーマンガの読解過程―コマ・絵の読解に注目して』マンガ研究（2017），49-72頁.